

## シンポジウム「日米の人的交流 -本当の課題-」

開催日： 2016年7月6日（水）	場所： 経団連会館
来賓： 黒田 一雄	早稲田大学 国際部長、同大学院教授
マシュー・サスマン	日米教育委員会（フルブライト・ジャパン）事務局長
加藤 ゆかり	留学ジャーナル社 副社長
パネリスト： ブライアン・ウォレス	ジョージア州ミルトン市ケンブリッジ高校教諭
メラニー・ワーナー	テネシー州セイモア市セイモア中学校教諭
ジェニファー・ウェスト	ミズーリ州カンザス市パークヒル高校教諭

米国の大学等への日本人留学生は、2006年の4万人から、2015年には1万9000人とほぼ半減している。一方、日本への米国人留学生は、年間5000人程度に留まっている。そこで、経済広報センターは、7月6日、日米間の人的交流を活性化するための課題と対策をテーマに、内外の有識者3名と同センターの招聘事業で来日した米国の中学、高校教師を交えてシンポジウムを開催した。

最初に登壇した留学関連サービスを提供する留学ジャーナルの加藤ゆかり副社長は、「短期の語学留学などを含めれば、米国への留学生は実は増加している。また、文科省の調査によれば、4割の高校生が留学を希望している。実際に留学する高校生が1%程度であることを考えると、これはむしろ留学に対する関心が高いことを示す」と述べた。そのうえで、「日本の若者が必ずしも内向きだとは思わない。最大の課題は英語力の強化だ」と指摘した。続いて、早稲田大学国際部長の黒田一雄教授は、同大学と米国の大学とのさまざまな提携の現状について説明し、「本学では、学生の留学促進の観点から、海外の大学との間で、単位の互換などの対策を進めてきた。この結果今日では、毎年1000人規模で日本人学生が留学し、このうち、米国へは400名超が留学するようになった」と述べた。日米教育委員会（フルブライト・ジャパン）のマシュー・サスマン事務局長は、「現在はさまざまな奨学金制度があり、留学する環境が整っている。一方、米国の大学側が求める留学生の英語レベルは近年、上がってきており、日本の学生には厳しい状況だ」と述べ、英語力の強化が求められるとの考えを示した。

以 上

